

沖縄本島における地域づくりに関する研究

谷沢 明

はじめに

本稿は、平成 13 年度から取り組んでいる歴史・風土・文化を活かした地域づくりに関する研究の継続として本年度から実施した愛知淑徳大学助成研究「集落及び都市景観形成に関する研究」（平成 19、20 年度）の調査・研究成果の一部を報告するものである。

筆者は、これまで、日本各地の歴史的町並みの調査研究を行い、歴史的な生活環境や町並みの形態の成り立ちを読み取る中で、よりよい都市環境や景観、あるいは地域社会の個性を生み出す諸条件を探り、人間生活と都市形成とのかかわりを考察してきた。本研究もその延長線上にある。

本研究題目による最初の調査地は、沖縄県を対象とした。沖縄県においては、離島である竹富島、渡名喜島などに伝統的な集落景観が残されているものの、戦災を被った沖縄本島においては、首里金城町を除いて歴史的な都市・集落景観はほとんど見る事ができない。しかしながら、沖縄本島のいくつかの集落において、良好な集落景観を創生し、環境を保全する取り組みで注目すべき地域は存在する。今回は、沖縄本島で特色ある地域づくりに取り組んできた読谷村座喜味地区、北中城村大城地区、那覇市首里金城町の事例を挙げ、現地調査で得た資料・インタビュー調査を基に、それぞれに展開された地域づくりのあり方を整理し、その特徴について明らかにしていきたい。

1、読谷村座喜味地区

あらまし

読谷村は、沖縄本島の中部、西海岸の東シナ海に面する地域である。東は読谷山岳（海拔 200m）から緩やかな丘陵地となり、西は座喜味城跡（海拔 130m）のある丘を中心に台地が広がり、北に残波岬がある。この地は、14 世紀後半、中山王察度の命により中国・明へ進貢貿易船を出し、外来文化を取り入れていた。また、15 世紀半ば、読谷山按司・護佐丸が座喜味城を築城する。読谷村のほぼ中央、那覇から約 27 km に位置する座喜味地区は、世界遺産「琉球王国のグスクと関連遺産群」の一つに登録された座喜味城跡の南に広がる 485 世帯・1,609 人（平成 17 年 2 月）の集落である。この地は、昭和 51 年の農村基盤総合整備事業導入以来、集落整備・土地改良が進み、その後、地域の伝統文化への見直しが始まる。そして、読谷山花織の工房やヤチムンの里が建設されるとともに、ベニイモの特産品づくりなど、地域の共同体をいかした集落づくりが推進される。また、昭和 62 年、国土庁主催の第 2 回農村アメニティコンクールにおいて、座喜味地区は国土庁長官賞を受賞し、その特色ある地域づくりが高く評価された。

座喜味は、戦前は、緑豊かな地域であったが、その緑は戦争で焼失した。それが、戦後、地域の人々の努力により復活した。この地域で行われている取り組み「座喜味城と花でむかえるふるさとづくり」は、平成17年に「沖縄ふるさと百選」¹⁾にも選定された。

その地域づくりの始まりは、地域の人々が一丸となった、戦後の苦難の道からの立ち上がりであった。昭和20年、米軍の沖縄上陸と同時に読谷村は占領された。昭和21年、村域の一部に居住許可が下り、600余人の村民による「読谷山建設隊」が編成され、読谷村の再建が始まった。昭和22年、座喜味地区では、本島北部の国頭地方などへ避難していた人々がまずトーガ地域へ帰郷し、仮小屋の生活をしながら焼け野原の復興に着手する。その郷土復興に一致団結して立ち上がったのが、座喜味婦人会の人たちであった。そして、婦人会は、生活改善運動や子供たちの教育活動、また地域の清掃美化活動などに取り組み、やがて「座喜味環境を守る婦人の会」を結成し、地域づくりに大きな役割を果たすこととなった。

座喜味婦人会の結成は、大正4年のことで、古い歴史を持っている²⁾。戦争で座喜味婦人会の活動は中断したが、昭和23年、トーガ地域での仮小屋の生活の中で、婦人会活動が再開された。当時、まだ本集落への帰郷は許可されておらず、住まいも不充分、食糧はアメリカからの給与物資にたより、衣服も米軍の野戦服や落下傘の布を再利用してつくるといった中で暮らしの建て直しが始まった。戦後間もない婦人会活動において力を注いだのは、泉井戸を清潔にする大掃除、泉井戸に向かう川道の修理で、これは、婦人会総動員の作業であった。昭和26年、座喜味本集落への移転が始まり、公民館が建設された。そして、この公民館が婦人会をはじめ地域の人々の活動の拠点となった³⁾。

昭和20年代後半、婦人会は、生活の合理化運動に取り組み、昭和29年、生活改善実行グループが結成された。そこでは、生活改善普及員の指導のもとで、台所の改善を行い、改良カマドをつくり、料理講習が行われた。昭和30年代に入ると、婦人会は環境浄化の問題に取り組み、蠅や蚊の発生源をなくすため、月ごとに清掃作業を行った。また、健康な子供を産み育てる機運を高めるための「赤ちゃんコンクール」も始まった。さらには、「家計簿記帳グループ」が結成され、貯蓄に励んだ女性たちの蓄えは、子供の勉強部屋改善資金や進学資金に使われるようになった。

昭和32年、婦人会の人たちは「教育隣組」を結成し、児童生徒の学力向上と不良化防止に取り組むことになった。「教育隣組」は、地区内を5班20組に分けて組織され、会長・副会長は、婦人会会長・副会長が兼務し、事務所は公民館におくことになった。当時、PTAが組織されていたものの地域とのつながりが密接でなかったため、学校や公民館と連携を図り、より地域に根ざした「人づくり」の仕組みとして考え出されたのが、婦人会を中心とした「教育隣組」であった。戦後の復興期を経て、婦人会の活動が勢いづき、この「教育隣組」が結成された昭和32年に第17代座喜味婦人会会長を務めたのが、松田敬子さん(昭和2年生まれ)⁴⁾である。以下、松田敬子さんからの聞き取り調査をもとに、地域づくりにかける思いを記していきたい。

2、松田敬子さんの話

生活改善と教育隣組

松田敬子さんは、昭和21年、疎開先の国頭地方から読谷村に帰ってくるが、周囲はすべて

焼け野原であった。銃後を守っていた人たちが集まって、抱き合って泣いた。松田さんは「くやしかった。死ぬかと思っていた。こんなことってあるもんか、戦争に負けたら、自分たちは生きておれないと思っていた。負けたとたんに生きる希望を失ってボーとした。その中から立ち上がって戦争で亡くなった人たちの分も生きていかなければいけない、私たちは助け合ってみんなで協力して生きていかなければ、と思った」と当時を振り返る。

村に帰ってきて、食べるものがない。畑を耕して、ひもじい思いをしながらも、生きていくしかない。頼るものは、自分の力しかない。とにかく自分たちの手で腹にたまる食料を作ることであった。沖縄は、田んぼがほとんどないので、輸入が途絶えたら何もない。畑に出て働くしかない。石ころをよけて畑に芋を植えた。畑に生い茂る草を前に「草に負けてたまるか」と歯を食いしばって畑仕事にいそしんだ。できた作物は皆で分け合い、地域の人たちは力を合わせて戦後の窮乏期を乗り切っていった。座喜味には、相互扶助のユイマールの精神が残っていた。「死んでたまるか、とやっとの思いで生きてきた。そんな中で生きる知恵がついた。それは経験からであり、学問からではなかった」と松田さんは語る。

戦後、婦人会の活動が再開し、婦人会は地域の大きな要となった。地域で飢えないように、幸せをつかもう、と皆気持ちを一つにしていた。戦争が終わって10年節目で世の中はおちつき、腹いっぱいご飯が食べられるようになった。ご飯がいっぱい食べられるようになると、その後、考えるようになったのが人間らしく生きることであった。そこで、婦人会が取り組んだことは、生活改善や子供の教育であった。

婦人会の活動と生活改善は一体であった。婦人会活動の拠点は公民館で、生活改善普及員が指導に当たった。生活改善普及員の話は、アメリカ軍の塵捨て場で用紙を拾ってきて、鉛筆を軍からもらって書き留めた。健康に関することをはじめ、生き延びていくための知恵を得るために皆、夢中であった。「戦争に勝つための勤労奉仕に出ているため、私たちの世代は教育を受ける機会がなかった。だから、よけいに夢中であった。夢中になると人間には差がない。学びたいという気持ちは、皆、同じであった。それが後の復帰力の強さにもつながっていったと思う」と松田さんは話す。

また、家計簿をつける運動も婦人会が中心になり、「家計簿記帳グループ」を結成して取り組んだ。家計簿をとおして家庭の実態を見つめ直し、少しでも収入を増やすにはどうしたらいいのかを家計簿をとおして考えていった。「小さなことではあるが、足元を見ながらしっかり根を張る、それが婦人会の目指したものである」と松田さんは話す。復帰前後、ドルが円に変わったが、座喜味の婦人会のメンバーは、「家計簿記帳グループ」などの活動を通じて家計管理の習慣がついていたため、物価高の時代を乗り切ることができた、ともいう。

戦争直後は、子供の教育にまで手が回らなかった。子供たちに腹いっぱい食べさせて、毎日、子供を学校に行かせる、これが親たちの願いであった。「成績の話などどうでもよかった。とにかく、出席が一番。子供に病気をさせず健康な身体で毎日学校に通わせる、これが基本である」、そのことを婦人会の人たちは、子供を育てながらつかんでいった。

一人では何もできないので、子供は地域でお互いに助け合って育てた。他の家の子供もいい子に育てようという思いで、婦人会は「教育隣組」を組織した⁵⁾。「教育隣組」は、単位である組の子供たちを家に集めて勉強を教える組織である。当時、婦人会長を務めていた松田さんは、

その責任者となった。「地域づくりは人づくり、これが村づくりの原点である」と松田さんは考えていた。

地域の皆が心をつなげて地域を良くしていく、それが今の村づくりにつながっていった。そして、「教育隣組」で地域ぐるみで育てられた世代が今日の村づくりを中心になって支えている、という。「婦人会の活動は、まず、家をしっかり守り、健康な子供を育てること。学力のある子供に育てることではない。嘘をつかず、皆に迷惑をかけない子供として人並みに育てること、ただそれだけである。地域で学ぶということは大切である。自分たちの智恵を教えあって生きていく。私たちは戦争の苦しさ、みじめさを味わい、貧しさを体験している。だから、皆がいっしょになって幸せをつかもうと頑張った」と松田さんは語る。

環境を守る婦人の会

昭和30年代の終わりから、集落の空き地に花壇をつくろうという動きが起こり、婦人会は、班ごとに花壇をつくった。それが、現在行われている「座喜味城と花でむかえるふるさとづくり」の始まりである。この花壇づくりは、集落を良くしたい一心で、皆で苗を持ち寄って、婦人会と公民館が中心になって行ってきた活動である。そのことがきっかけで、後には行政も動き出し、道端や公共施設にもたくさん花を植えるようになり、美しい座喜味の集落景観が生まれた。環境美化に関わる活動は、じつは戦前からあった。それは、伝染病予防のための台所周りを清潔にする運動で、これも婦人会が中心になっていた。そして、戦後は、台所だけでなく、家の中や屋敷をきれいにしようと、花を植える運動につながっていった。

平成4年、座喜味では、「環境を守る婦人の会」が結成された。それは、以前、婦人会で生活改善に取り組んできたメンバーを中心として結成された会である。無論、松田さんが中心人物である。松田さんは話す。「婦人会、生活改善でやるべきことはほぼ終わった。そこで、自分たちがやれることを考えた。次は自分たちのために生きよう、自分たちの健康のことを考えようと思って、歩け、歩きの運動をはじめた。歩いていたら、道にゴミが捨ててある。ポイ捨てをなくしないと集落はよくなるらない、と思ったのが会をつくったきっかけであった」。

健康づくりの朝の散歩には袋を持って歩き、そこで目に付いた空き缶などを拾い集めて公民館に持ち寄った。その空き缶を売り、3年間で約3万円集まった。「たまるぞ。おい、皆で拾おう。お金になるぞ！」と面白くなって活動にはずみがついた。そのようにして集めたお金はもったいなくて使えず、地域の活動などに寄付することになった。

このような地道な活動も5年続けていると周囲に大きな影響を与えてくる。空き缶拾いで得たお金は、自分たちのために使わず、地域のために使うようにした。たとえば、そのお金をお茶代、菓子代の足しにと、各字のディサービスに使ってもらうように福祉活動に寄付すると、ディサービスに訪れるお年寄りたちが感激し、空き缶を持ってディサービスに来るようになった。このようなことが浸透すると、「いいことをやっている」と皆が認め始め、ゴミは選り分け、空き缶は洗って持って来るようになり、地域全体のゴミの出し方までが変わってきた。また、空き缶拾いで得たお金は、後輩たちの活動のためにと婦人会にも寄付した。婦人会が環境美化で賞をもらったが、表彰式に行く費用がない。「空き缶拾いで集めたお金をあなたたちに持たすから」と、飛行機代を出すことにすると、婦人会の若い人たちの意識も変わってきた。

「空き缶拾い、これは、お金の問題ではない」と松田さんは考えるようになった。

さらに、空き缶拾いで得たお金は、座喜味区にも役立ててもらおうとした。区長に今、何が一番欲しいかと尋ねたところ、答えは案内板であった。座喜味地区には座喜味城跡があるので観光客がやってくる。そのための案内板がなくて不自由をきたしていた。座喜味区の土地は軍用地になってしまったため、区の財産もなく、独自の予算で案内板をつくることは難しかった。台風がきても倒れない案内板を立てるためには、周囲の整地を含めて350万円の費用がかかるという。空き缶拾いで集めた金が60～70万円貯まっていたので、これを使ってもらおうと申し出た。

この企てを聞いた村役場は、空き缶拾いでこれだけの金が集まったことに驚いて、足りない分は補助しようということになった。それだけではなく、ノーベル基金をはじめ、あちこちから寄付が集まり始めた。また、寄付する金はないが労力奉仕で石を運んでくるという人も現れた。さらには、案内板に貼る航空写真の寄付もあった。この航空写真に、集落の御嶽や拝所、泉などを書き込み、立派な案内板ができた。皆が力を合わせて作った案内板は、昔、公民館のゴミ捨て場であったところに立っている。

「環境を守る婦人の会」は、自分の地域はいつでもきれいにしておきたい、子や孫が幸せに暮らせる地域を創り、残していきたい、そんな思いを持った女性たちがつくったグループである。そして、その活動は、地域を愛する心と、奉仕精神に支えられ、今日に至っている。

安全な食生活を伝える

「環境を守る婦人の会」に、地域を振興する緑化の基金から100万円のお金が下りることになった。その100万円を有効に使おうと仕掛けたのが「サワフジ祭」と「椿展」である。去年企画した「サワフジ祭」は台風で実現できなかったが、今年は初の催しである「椿展」が開かれた。また、公民館前では朝市も始まった。朝市では、野菜の販売だけでなく、添加物が入らず、親の愛情のこもった昔からの食べものをつくって売ろうという話になった。

行事開催の経費について、「お金は、環境を守る婦人の会で獲ってきます、あとは、皆で使いましょう」というやり方をしている、という。何か続けていけば、必ずものになる。婦人会も生活改善も、そして、「教育隣組」も継続してきたからこそ成果が出た。やっていたら楽しいから、継続は苦にならない。何かをいつも仕掛けておかないと、地域は発展しない。「女が立ち上がらないと何もできない」と松田さんは笑いながら話す。

一昨年、新しい公民館が完成した。そのとき、婦人会では、地域をより発展させ、皆が拠り所とする公民館にするために調理室を大きくして欲しい、と頼んだ。その目的は、健康づくりにあった。現在、問題になっているのは、食生活である。「今のようにハンバーガーばかり食べているような時代はもう終わりにしよう。食生活を変えていかなければならない。若い人たちの意識が変わらなければ食生活は良くならない。子や孫たちに引き継ぐ最後の仕事はこれしかない。安全な食生活を引き継いでいかなければ、死ぬわけにはいかない」と松田さんは思った。安全な食生活の伝承、それは、松田さんたちが手がけた生活改善の総仕上げでもあった。

新しい公民館に立派な調理室ができた。健康づくりの手始めに、自家製の味噌と醤油をつくってみたい。豆を砕いて粉にする機械が公民館に欲しいと願った。案内板をつくって年月も経

ち、その後の空き缶拾いで得たお金が 65 万 5 千円貯まっていたので、それを機械の購入代金にあてることにすることになった。「皆で使うお金ならどこかからか集まってくる。資源を生かしているから、その金がいい方向に動いている」と松田さんは話す。

さらに、「裸足になって飛び込む。あとは、開き直ってやることです。持っている智恵は使い果たして死にたい。女が走り出せば、男もついてくる。年寄りが走り出せば、若い人もついてくる。皆で一緒に喜びながらやるのが地域づくりの良さです。地域は奉仕で成り立っている。奉仕だからこそ楽しい。ほんとうに実践できるのは地域です。地域あって国がある。大きなことをやれなくても、当たり前前の小さなことからきちんとやれば、それでいい。人間、真心があれば、幸せは必ずやって来る」と松田さんはその人生を語った。

2.北中城村大城地区

あらまし

北中城村は、沖縄本島の中部に位置し、起伏が多い丘陵地帯が続く緑に恵まれた地域である。大城は、那覇から北東へ 16km の距離にあり、県道 146 号を挟んで人家が広がる、138 世帯・381 人（平成 19 年）の集落である。集落内には国の重要文化財中村家住宅が屋敷を構え、南の中城村には世界遺産に登録された中城城跡もあり、歴史の香りに包まれている。

県道の北東側には大城御嶽（ウフグスク・ウタキ）、大城の草分けとされる喜友名根所（チュンナー・ニードゥクル）、古知屋根所（クチャ・ニードゥクル）、ノロ殿内火の神などがあり、県道北東側が昔の集落の中心地と考えられる。また、県道南西側の街路には中村家住宅が屋敷を構える。県道沿いには、東から、アガリヌカー、チブカー、イリヌカーの共同井戸がある。これらの共同井戸は、昭和 30 年代半ばまで使われていた。アガリヌカーは、若水を汲む井戸として、また、最も古い共同井戸といわれるチブカーは、新生児の産水に使われていた。アガリヌカーの下の池の周囲は小公園として整備されており、この小公園の上に「大城喫茶店」という手づくりのお休み処が建てられている。さらに、イリヌカーの周囲は「兄弟広場」として整備され、小集落ながら随所に人の手が加わったぬくもりが感じられる。

大城は、集落の小道や民家の入口に手づくりのシーサーが飾られ、草花も多く、潤いのある集落景観が見られる。この地で地域づくりを実践するグループに「大城花咲翁会」があり、平成 14 年、「沖縄、ふるさと百選」「夢のあるふるさとづくり」に認定された。「大城花咲翁会」とは、いったいどのような組織で、どんな活動をしているのだろうか。集落の佇まいからして、きっと、熱心な取り組みが行われているのではないかと、そんな思いで地区を訪ね、会長・外間裕（昭和 17 年生まれ）さん、副会長・新垣秀昭（昭和 17 年生まれ）さん、会員・新垣正良（昭和 30 年生まれ）さんの 3 人から地域づくりにかける思いを伺うことにした。

大城花咲翁会の活動

昭和 62 年、復帰 15 周年記念事業として沖縄国体（海邦国体）が開かれるが、それに連動して北中城村でも環境美化促進運動が行われた。地域の環境を美しくしようとする動きは、そのような形で村の主導で始まったが、国体が終わると中断し、長続きしなかった。その後、平成 6 年、「古城周辺歴史的景観整備事業」が始まった。これは、10 年がかりで、中城城跡の周囲

を整備しようとするものである。この事業に伴い、地域の宝を見つけ、地域のあるべき姿を考えてみようということになった。大城周辺には中城城跡、中村家住宅、萩堂遺跡と3つの国の文化財があり、改めて故郷の素晴らしさを発見することになった。そして、これらを活かして、故郷をつくりあげていこうという機運が高まった。その流れの中で平成11年、新垣秀昭さんの発案で「大城花咲翁会」が結成された。「花咲翁会」は、枯れ木に花を咲かそうといった意味で名付けた、という。

大城には大西テラスゴルフ場があって、ここで月1回、地域の中老年のゴルフコンペが開かれる。ゴルフの後には、表彰式と打ち上げを近くの居酒屋でやっている。そこで、男たちはホラを吹く。酒が入るとよく喋る。女性は井戸端会議で喋るが、男たちは居酒屋談義でない、なかなか本音が出てこない。泡盛がないといい話が出てこない。「大城には中村家住宅がある。近くには中城城跡もある。でも中村家住宅に来た人たちは、それだけでは満足しないだろう。せっかく来ていただいた人たちがどうすれば満足できる地域になるのだろうか」そんな話に花が咲いた。

「それならば、中村家住宅を囲んで集落を全部庭園にしまったらどうだろうか」、そんなアイデアが出された。話を聞き流していたら実現できない。「それでは、実践してみよう。試しに何年かやってみよう」ということになり、「花咲翁会」結成の企画書がまとめられた。外間裕さん56歳、新垣秀昭さん57歳のときであった。

企画書づくりにあたり、趣旨・事業内容・会員資格などの話し合いが行われた。会員資格は、発足当時は、「オジイと呼ばれても抵抗のない人」と少し冗談めいていたが、現在は55歳以上となっている。仲間を募ると、中老年の男性が集まってきた。そして、空き地の整備や、花壇の整備など月1回の活動が始まった。現在、活動は、毎月第2第3日曜日の月2回に増えている。発足当時は、とりたててビジョンもなく、サークル活動のような形で、とりあえず活動を始めたのであった。

やがて、大城地区を将来どうすることが大切か、そのような話題も出始めた。自治会活動の中で活動の位置づけを行い、平成13年の区民総会で、「大城の地域づくり構想」⁶⁾を提案し、それを自治会で議論して、総会にかけて実践しようという動きになった。構想のコンセプトは、「花と緑に囲まれた芸術の里」をつくろう、というものである。それに向けて、それぞれの団体の役割を明らかにして、取り組みが開始された。

「大城花咲翁会」は活動を始めて、今年で9年目に入る。なぜ、男性がこのようなグループを結成したかについて、発案者の新垣秀昭さんは「沖縄のオバアたちはやるのがいっぱいあり、遊びも上手だ。しかし、リタイアした男たちは、自分たちで遊ぶことが苦手。いかにして中老年の男たちを家の中から引っ張り出たらいいかを考えた。活動を通じて生きがい、健康づくりをしようという狙いがあった。いってみれば、男たちの居場所づくりの一環でもある」と控え目に話す。

このような環境美化活動は、本来、自治会全体でやるのがベストであるが、月2回の作業に出てくるのが難しい人もいる。だから、同じ趣味を持った人に呼びかけ、同好の士の集まり、好きなもの同志の集まりとしてやることになった。作業への出席についてはとやかく言わない。年1回でもいいから、出てくれればよい。強制はしない、それが会のモットーである。この七

地では、ユイマールの精神が昔からあるので、皆で協力していくことが自然にできる、という。

活動は、外部から評価を受けることも大切になる。平成 13 年には、財団法人「あしたの日本を創る協会」の「ふるさとづくり大賞」に応募して地域振興奨励賞をもらい、「大城花咲翁会」の活動が評価された。また、翌 14 年には社団法人「日本観光協会」の「花の観光地づくり大賞」に応募して努力賞を受賞した。「褒められると男たちは喜ぶものである。集落を歩く人から『きれいになりましたね』と言われると、手が抜けなくなる。もっときれいにしようと思うようになる」と活動継続の秘密を新垣秀昭さんは語る。

「大城花咲翁会」では、会費はとっていない。作業で汗を流した後、皆でビールを飲むのが楽しみだ、という。そして、ビールを飲んでユンタク⁷⁾しながら、いろんなアイデアが生まれてくるのだ、という。そのアイデアの一つが、「花と緑に囲まれた芸術の里」の一環としての「ムーンライトコンサート」である。「ムーンライトコンサート」は、6月の梅雨明けの満月の夜に開催する。これは、昨年で6回目を迎えた。きっかけは、ひよんなことであった。外間裕さん・新垣秀昭さんが還暦を迎えたとき、仲間でビールを飲んでいて、飲み過ぎて、日が暮れてしまった。すると、よい月が出た。そこで、思いついたのが「ムーンライトコンサート」であった、という。

昔、沖縄の男女には、農作業が終わって夜になると語り合ったり、歌を歌ったりするモーアシビ⁸⁾という原っぱで遊ぶ風習があった。「我々もそれを再現しようじゃないか」という話になった。そして翌年、61歳になったときにポケットマネーを出し合って、婦人会の人たちにツマミをつくってもらい、酒を買ってきて、地区の人に集まってもらって音楽会を開いた。それが「ムーンライトコンサート」の起りである。2回目まではアガリヌカー公園の池のほとりでコンサートをやっていたが、3回目以降は規模が大きくなったので、公民館横の広場に開催場所を変えた。ゲストの出演料はタダ、終わった後で交流会をするようにしている。交流会では、皆で夢を語らう楽しみがある。

コンサートを始めた次の年には「スウジグワー美術館」も開くようになった。これも、「花と緑の芸術の里づくり」の一環で、シーサーなどを作って、スウジグワーと呼ばれる小路に展示している。最初の2年間は村から補助金が出ていたが、補助金が切れた後も続いている。この催しは、今では大城区民全体のものになり、プロの作品も出展されるようになり、プロの作品は中村家住宅、区民の作品は公民館に展示されている。

大城の地域づくりのもう一つの柱が「我が家は芸術品運動」である。これは、地域全体を自分の庭と考え、お互いの庭をきれいにしようとする運動で、オープンガーデンをやるようになった。オープンガーデンには15、16軒の家が協力している。また、平成16年からは、沖縄県立芸術大学の支援のもとで、集落に彫刻を99点飾る試みを始め、現在35作品が展示されるに至った。

財政事情が厳しい中、行政と地域住民の協働は、これからますます大切になってくる。行政が主導するのではなく、地域から何かを発信していくことが大切になる。行政で整備したものを地域で維持管理していくことも大切となる。

「活動は、やりながら考えることが秘訣である。あれやこれや迷っていても前に進まない。まずは、やってみること。作業の後のいっぱいビール、それが、みんなの気持ちをやわらげ

る。ビールを飲んだ勢いでホラも吹く。そして、ホラをそのままに終わらせないで夢に変えて実現する。その繰り返しである」と新垣正良さんは楽しそうに活動の原動力を語る。

また、いい話を覚えておくことも大切である。実現するためには、どんなに小さなことでもまずは企画書にまとめる。お金をどうしようとかと考えすぎたらいけない。「まず、自分たちが楽しむためにポケットマネーを出してやろうじゃないか、そんなふうにして始める。考えすぎて、計画をしっかりと立ててからやろうとすると、かえって実現しにくくなる。事業をするときには、いろいろな意見の対立を乗り越えてやっていく。まずは、第一歩を踏み出してみることが地域づくりに大切である」と新垣秀昭さんは強調する。

彫刻の設置には台があるので費用がかかる。自治会と共催している「ムーンライトコンサート」や「スウジグラー美術館」もかなりの経費がかかる。「大城花咲翁会」は、資金面では、自治会に迷惑をかけないように心がけている。そのため「大城花咲翁会」のメンバーは企画書をつくって、財団などの助成事業に積極的に応募して、外部資金を集めながら行事を進めている。「大城花咲翁会」では会費を取らず、また、地元の行政にもあまり頼らず、公募の助成事業で活動資金を獲得して活動を展開しているのである。「公募の助成事業を導入することは、やっていることの外部評価にもつながってくる。『大城花咲翁会』では、資金集めも含めて、楽しみながら『大城の地域づくり構想』の実現に向けて活動をしている」と新垣秀昭さんはその活動の進め方を語る。

3、那覇市首里金城町

あらまし

首里金城町は、首里城のある台地の南斜面に位置し、首里城の城下町として発達した地域である。王府時代から琉球処分翌年の明治13年までは、内金城村と呼ばれていた。金城町は、沖縄戦の戦災の被害が少なく、御嶽の森、石畳道、琉球石灰岩の石垣に囲まれた赤瓦の民家、そして、地域内に点在する昔の水場である「カー」などが、歴史的な雰囲気を与えている。

金城町は、平成6年、那覇市により「首里金城地区都市景観形成地域」に指定され、以来、町並み景観の保全活動が開始された。那覇市は、昭和60年、「那覇市都市景観条例」を制定し、建築物・工作物などの景観を保全する取り組みを始めるが、最初に地域指定されたのが、この金城町であった。その後、平成14年に「壺屋地区都市景観形成地域」「龍潭通り沿線地区都市景観形成地域」が指定され、現在、那覇市内では3つの地域が「景観形成地域」となっている。

昭和60年に制定された「那覇市都市景観条例」は、その目的に「市街地の美観の形成、歴史性及び地域性豊かな景観の保存と再生」を掲げているものの、最初に景観形成地域として首里金城地区が地域指定されたのは、条例制定9年後とだいぶ時が経ってからであった。首里金城地区が地域指定された平成6年は「沖縄県景観条例」が制定され、「地域の特性を生かした優れた景観を守り育て、つくり、ふるさと沖縄の創生に寄与する」と謳われた年でもあった。また、それに先立ち、平成4年に首里城正殿が完成しており、その後の「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の世界遺産登録（平成12年）に向けての動きも、地域の景観保全を盛り上げる機運となっていた、と見てよいであろう。

「首里金城地区都市景観形成地域」では、「歴史的景観の保全」と「生活環境整備の推進」

事業が実施され、「那覇市都市景観条例」に基づき、届出制度、景観形成基準の策定、工事費の一部助成が行われている⁹⁾。「歴史的景観の保全」の内容は、①石畳道と石垣で構成されている街路空間の保全、②共同井戸・御嶽等・社会空間の保全、③伝統的家屋・樹木等斜面緑地の保全である。また、「生活環境整備の保全」の内容には、「道路・排水路・上下水道等の基盤施設の整備を積極的に図り、良好な生活環境の形成を促進する」ことが挙げられている。

首里金城町自治会長・堀川恭宏さんの話

石畳の続く金城町に住む人々は、この町並みや景観保全についてどのように受け止めているのであろうか。首里金城町自治会長を務める堀川恭宏さん（昭和9年生まれ）¹⁰⁾を訪ねて話を伺った。以下、堀川恭宏さんの話を記す。

金城町が景観形成地域に指定されると、生活のためのインフラ整備が頓挫した。下水道や、雨水を流す管もなく垂れ流しの状態である。また、汚水管も未整備で石畳の周辺の家はすべて汲み取り式便所である。金城町は住宅街で、店が遠く、病院も遠い。石畳の道には手摺りが整備されておらず、お年寄りが歩くと危険である。金城町は、見た目と違って、生活したら不便なところである。

そんな不便などではあるが、引越しをする人はほとんどいない。年配の人にとって金城町は、二つの理由で離れがたい町となっている。その一つは、「生活したら不便だが、暮らしたらこんないい町はない」と多くの住民が思っているからである。金城町では車の音は聞こえない。埃はたたない。静かである。とくに朝晩は静かであり、昔と変わらぬ独特な空気が漂っている。だから、この町に住んでいると気持ちが癒される。梅雨時になると、蛍がいっぱい出てきて垣根にすがりつく。ウリズンの季節（梅雨前の1週間か10日間）になると、一斉に花が咲き始める。夕方になると風が花の香りを乗せて吹き抜けていくから、風に香りがある。そのように自然が残り、昔のままの風情が満喫できるから、年配の人にとっては離れがたい土地となっている。

もう一つの理由は、この町に住むことへの誇りである。住んでいる人はほとんど気がついていないが、沖縄の人には、王統の都である首里に対する思いや憧れはことのほか強いものがある。そのようなことが地元にはなかなか気がつかない。外に出て、はじめてそれに気づく。「私たちは、離れがたいところにいるんだな、ということを感じますね」と堀川さんは嬉しそうに話す。

金城町は、インフラが整備されていないからといって、他所に移り住もうという人はほとんどいない。金城町は、150年以上前から住んでいる人が多く、先祖からの不動産を売ったり買ったりする人はほとんどいない。アパートも建たなければ、当然、近代的なビルも建つようなところではない。観光客がたくさん訪ねてくる金城町の魅力を、「何百年も前の石畳が残っている。風情がある。この自然が人を呼んでいる」と堀川さんは表現する。

金城町の歴史を象徴する石畳の道は、県の史跡・名勝になっているため、現状変更ができていない。そのため、お年寄りにとって危険な箇所も少なくない。石畳の道に手摺りがついている所が一カ所だけあるが、この手摺りを市につけてもらうのに約9年かかった。手摺りがついたのは、石川県能登から来た年配の人が滑って転んで骨折したことがきっかけであった。自治会

では、行政に対して、道を安全に管理して欲しいという要望を出した。すると、行政は、慌てて事故のあった場所のみ手摺りをつけた。この手摺りがついたおかげで地元のお年寄りたちは喜んでいる。金城町には、石畳の真珠道を中心に11の細い脇道がある。これらの脇道には、戦争で痛んでデコボコな道もある。これらを平らに整備して欲しいと役所に陳情したが、近年、これがようやく取り上げられた。戦後60年近く変わらなかったことが、今、ようやく変わりつつある。

平成8年、石畳の道の四辻に「村屋（むらや一）」が建てられた。地元で公民館として使っている木造・赤瓦の伝統的な様式の建物である。村屋を建てたきっかけは、観光客のトイレ問題からであった。首里城が復元されると、金城町にも大勢の観光客が訪れるようになった。観光客が用を足したくても金城町には公衆便所が整備されておらず、地元の人も、汲み取り式だから便所を貸したがらない。金城町は沖縄の顔・歴史の顔であり、観光の目玉である、と役所は知っているが、観光客に対する配慮がいまひとつであった。地域の人たちは、観光客に対する配慮がもっとあってしかるべきだ、と行政に陳情した。この結果、観光客が自由に使えるトイレを備えた施設として村屋が建てられた。村屋は昔風の家を再現しようと、釘を使わず木組みの建物でつくり、村屋のトイレは簡易水洗式とした。

村屋は、石畳の勾配のきついところに建っているのだから、観光客の格好の休み場になっている。村屋には縁側がついているので、夏の暑い日には縁側に座って涼むことができる。また、建物は軒が出ているので、にわか雨が降った時には、軒下に身を寄せることができる。村屋は、観光客だけでなく、地元の自治会・老人会・婦人会・子供会・各種サークルがその場所を活用している。村屋ができて、そこが自治会の求心力になった。

金城町には、内金城御嶽が祀られている。ここには、大アカギが茂っている。昔、アカギの周辺は、うっそうとした森であった。アカギは聖なる木で、精霊がアカギを伝って降りてくると信じられており、大切にされている。よくぞ戦争でアカギが生き残ったものである、と地元の人たちは思っており、折目節目に森に足を運んでいる。その森は、梅雨時には蛍もたくさん飛び交う場所となっている。

戦災を受けなかった金城町の大アカギの生い茂る森は、じつは、ハブの生息地でもある。また、金城町に多く見られる昔ながらの石垣の隙間にもハブは潜んでいる。そのため、土地の人は、石垣の道を歩く時、必ず真ん中を通る習慣が根づいている。この石畳の道は、絶えず注意して歩かなければならない。気を抜くと転んで怪我をしてしまう。また、雨が降ると滑る石とそうでない石があり、これを見分けて歩かなければならない。「ハブ、そして石畳の道で生活する緊張感があるため、金城町のお年よりは元気である」と堀川さんは意外な話をしてくださった。

金城町には、伝統的な水場である7カ所の「カー」がある。水源は、首里城周辺に降った雨である。昔は、首里城周辺は石畳であったから、降った雨は石畳の隙間から地面にしみ込んでいた。そして、雨水を石畳の下にある「クチャ」という保水力のある土で受け止めた。地中にしみ込んだ水は、石の樋である「樋川（ヒージャー）」を伝って「カー」に流れ落ちた。金城町の「カー」は、厳密に言うと、井戸でも泉でもない。地域の人たちはこの「樋川」から水を汲んで飲み水にし、「カー」で洗濯をし、野菜を洗い、生活の場として使っていた。

ところが、15年前に首里城を復元した時、周辺を全部コンクリートやアスファルトで固めてしまった。そのため、降った雨水は、海に直接流れ込むようになり、「樋川」の水は枯れてしまった。「カー」は、今、その役割を終え、昔の生活を偲ぶ歴史的遺産として残っている。

この内金城御嶽と「カー」に関わる伝統行事が、首里金城町自治会行事として執り行われている。それは、ムーチー、ハチウクシー、ウガンプトチである。

ムーチー（旧暦12月8日）は、月桃の葉に包んだ餅を供え、邪気払いをする行事である。これは、沖縄各地で行われ、冬の到来を告げる風物詩になっている。このムーチーには「鬼餅伝説」¹¹⁾があるが、この伝説の発祥地が首里金城町とされている。ムーチーは、本来、各家庭で行う行事であるが、お膝元でもある金城町では、自治会が健康・長寿を祈願する行事として行っている。

ハチウクシー（旧暦1月2、3日）は、年の初めに当たり、1年の幸いを祈願する行事である。自治会では、7カ所の「カー」と内金城御嶽の大アカギを巡って地域の人々の幸福と健康を神々に祈願する。人は、水があつてはじめて生きながらえる。その感謝をこめて、7カ所の「カー」を巡るのである。人は、水のあるところを通して神々に感謝を申し上げ、将来のお願いをするものである。ウガンプトチ（旧暦12月24日）は、年頭のハチウクシーの「お願解き」の行事で、ハチウクシーと同様に、「カー」を中心に巡拝し、1年間の無病息災に対して感謝をささげる行事である。

他にも、首里金城町自治会が関与して行っている伝統行事がいくつかある。それらは、トゥシビー¹²⁾、浜下り¹³⁾、ユッカノヒー¹⁴⁾、トーカチ¹⁵⁾、十五夜¹⁶⁾などである。金城町は沖縄の中心的な場所に位置する住宅地でありながらも、このように沖縄の伝統的な人生儀礼や年中行事を、自治会の行事として行っているところに、地域の絆が感じられる。また、戦後、新たに生まれたイベント的な要素を持った行事にも首里金城町自治会は積極的に参加している。それは、沖縄全島エイサー祭り¹⁷⁾、首里文化祭¹⁸⁾である。これらの諸行事を滞りなく執り行わないといけないから、自治会長は多忙である。「行事のもつ意味をしっかりと受け止め、足元を固め、次の世代につないでいくことが大切である。地域は、そのようなことで活性化していくのである」と堀川さんは話す。

首里金城町自治会では、家々に咲き誇る花木の樹木札を取り付ける試みを行った。ことの起こりは、通りがかった観光客から花木の名を聞かれて返事ができなかったことにある。植えている人でも名前がわからない花木もある。地域の人から提案が出て、自治会活動の一環として樹木札をつけることになった。樹木札は写真入りで、花木の方言名まで添えることになった。手づくりの樹木札をつくっていったら、120種類以上の花木が民家の庭に植えられていることがわかった。「観光客に尋ねられて、地元の間人は分かりませんでは、何とも不親切に聞こえるし、金城町のイメージダウンにつながる、と思ってやったわけです」と堀川さんは話す。

堀川さんは、「地域づくりで大切なことは、地域の人とのコミュニケーションをしっかりとつくりあげることです。地域の問題は私の問題であると敏感に反応することです。地域で起こったことはすぐにお知らせする。たとえ小さなことでも問題が起こったら即座に対応する。その信頼関係を築いていくことが大切です。何かを役所などにやってもらうのではなく、何ができるかを自分たちで絶えず考えていくことです。同じ地域に住むもの同士が心の通ったコミュニケ

ーションができ、信頼関係が生まれて、はじめて地域が固まっていくものです。地域づくりはまさにそれに尽きると思います」と語る。

まとめ

以上の調査研究を通して学んだことを要約すると、以下の通りである。

読谷村座喜味地区の地域づくりで注目されるのは、戦後、焼け野原から立ち上がった婦人会の活動である。婦人会は、生活改善運動や子供たちの教育活動、また地域の清掃美化活動、花を植える運動などに取り組み、やがて「座喜味環境を守る婦人の会」を結成し、地域づくりに大きな役割を果たすこととなった。婦人会の目指したもの、それは、小さなことであっても、足元を見ながらしっかり地域に根を張ることであった。地域の皆が心一つにして地域を良くしていく実践活動は、今日の地域づくりの礎となった。婦人会の生活改善グループから発展した「座喜味環境を守る婦人の会」は、自分の地域はいつでもきれいにしておきたい、子や孫が幸せに暮らせると地域を創り、残していきたい、そんな思いを持った女性たちがつくったグループである。そして、地域を愛する心と、奉仕精神に支えられて活動が展開された。その流れの中で近年取り組まれているのが安全な食生活の伝承であり、それは、以前行われていた生活改善の総仕上げでもあった。「裸足になって飛び込む。あとは、開き直ってやることです。大きなことをやれなくても、当たり前小さなことからきちんとやれば、それでいい。女が走り出せば、男もついてくる。年寄りが走り出せば、若い人もついてくる。皆で一緒に喜びながらやるのが地域づくりの良さです」と語る松田敬子さんの言葉に沖縄の「オバア」の心意気を感じる。

北中城村大城地区では、「大城花咲爺会」の活動が新鮮である。それは、「花と緑に囲まれた芸術の里」をつくろうと夢のある企画を展開する男たちの実践活動である。会の結成動機は、「沖縄のオバアたちはやることがいっぱいあり、遊びも上手だ。しかし、リタイアした男たちは、自分たちが遊ぶことが苦手。いかにして中高年の男たちを家の中から引っ張り出したらいいのかを考えた。いってみれば、男たちの居場所づくりの一環でもある」と振るっている。活動で汗を流した後、メンバーでビールを飲むのが楽しみ。そして、ユンタクしながら、いろんなアイデアが生まれてくる。男たちはビールを飲んだ勢いでホラも吹く。そして、ホラをそのままに終わらせないで企画書をつくって夢に変えていくのが「大城花咲爺会」のやり方である。あれやこれや迷っていても前に進まない。まず、自分たちが楽しむためにポケットマネーを出してやるうじゃないか、そんなふうにして始める。まずは、第一歩を踏み出してみるのである。「活動は、やりながら考えることが秘訣である」の一言は的を得ている。「大城花咲爺会」では、助成事業に積極的に応募して、外部資金を集めながら行事を進めている。それは、活動の外部評価にもつながってくる。それを楽しみながら地域づくりを進める姿は、これからの地域での実践活動の一つの方向性を示唆するものではないか。「オジィ」たちの言葉は、一歩、二歩引いているもののユーモアにあふれ、その発想・手法は、かなり先駆的である。

那覇市首里金城町は、沖縄県の中心的な場所に位置する住宅地である。歴史的な雰囲気を感じさせるこの地は都市景観形成地域に指定されており、石畳の道の安全性、インフラ整備と課題は多いが、「生活したら不便だが、暮らしたらこんないい町はない」と地域を愛する住民が多

いところである。首里金城町自治会では、伝統行事をはじめ各種行事を熱心に行うとともに、花木に手づくりの樹木札を取り付けるなど、訪れる人々を温かく迎える取り組みがなされている。「行事のもつ意味をしっかりと受け止め、足元を固め、次の世代につないでいくことが大切。地域は、そのようなことで活性化していく。地域づくりで大切なことは、地域の人のコミュニケーションをしっかりとつくりあげることです。何かを役所などにやってもらうのではなく、何ができるかを自分たちで絶えず考えていくことです。地域での信頼関係が生まれて、はじめて地域が固まっていくものです」と語る自治会長の堀川恭宏さんの言葉は、心に残る。

三つの地域で話を伺った方々は、沖縄戦を体験し、それに続く「アメリカ世」の中で育ち、あるいはその時代の中で子育てをしてこられた世代である。その生活体験を経て、一つの志を地域づくりへ向けていくプロセスは時期的にそれぞれ違いはあるものの、人々の絆をもってより良い地域を創生し、それを次世代に受け継いでいこうという思いは共通するものがある、といえよう。

謝辞

本研究は、愛知淑徳大学研究助成成果報告の一部である。研究費をいただいた大学当局に感謝申し上げますとともに、調査研究を実施するに当たり、現地でお世話・ご教示いただいた松田敬子さん（読谷村・元座喜味婦人会長）、島袋秀光さん（前座喜味区長）、外間裕さん・新垣秀昭さん・新垣正良さん（北中城村・大城花咲会）、堀川恭宏さん（那覇市・首里金城町自治会長）、上江洲均さん（沖縄民俗学会会長）をはじめ、関係者各位に感謝申し上げたい。

注

- 1) 平成 14 年から始まった「沖縄、ふるさと百選」は、農山漁村の持つ魅力を広く県民に紹介し、農山漁村に対する理解を進め、農山漁村の活性化に役立てようとする認定事業である。認定は、「集落部門」「生産部門」「交流部門」の 3 部門に分けて行われている。「集落部門」は、人々の営みが感じられる農山漁村、地域の特色が反映され、調和の取れている集落を形成する地域活動等が対象となっている。
- 2) 『読谷村座喜味婦人会 75 周年記念誌』（平成 2 年）によると、婦人会結成のきっかけは、山城ウシという人が、孝母節婦として全国表彰（大正 3 年）されたことにある、という。主催者は、記念品の鏡を村役場に送り、村長に伝達書を依頼した。そこで村長は、伝達書を有意義なものにしようと、各字から女性約 200 名を招き、県庁や郡役所などから来賓を迎えて、盛大な式を挙行した。この伝達式の翌日、出席して大きな感銘を受けた女性たちが村役場にやってきて、「字の婦人たちを集めて報告会をしたい」と村長に話を依頼した。村長は、その求めに応じて話をしたが、これを伝え聞いた周辺の字の人たちから同じような申し出が続出した。そこで村長は、次から次へと各字を回り、伝達式の話をするのであるが、これがきっかけとなり、話に感銘を受けた人々により、村内各地に婦人会が結成されていった。なお、山城ウシは、座喜味婦人会第 3 代会長を務めている。
- 3) 戦後最初に建設された公民館の設備は整っておらず、会合のとき、地域の人々はムシロや湯飲みを持参して公民館に集まっていた、という。
- 4) 松田敬子さんの活動は高い評価を受け、大蔵大臣・日銀総裁の表彰（貯蓄思想の普及と実践組織の指導育成・昭和 50 年・平成元年）、農林水産大臣表彰（農家生活の改善に寄与・昭和 58 年）、労働大臣表彰（婦人少年行政の推進に協力・平成 2 年）、沖縄県教育委員会表彰（社会教育活動に尽力・平成 7 年）、最高裁長官表彰（家事調停委員として貢献・平成 8 年）、沖縄県表彰（沖縄県婦人連合会館建設に支援・平成 11 年）、読谷村表彰（婦人会活動に尽力・平成 15 年）、国務大臣表彰（消費者保護の諸活動に尽力・平成 15 年）など数々の表彰を受けている。
- 5) 「教育隣組」は戦後の荒廃から立ち上がるための学力向上対策のために県の指令でつくられた組織であるが、これを真っ先に取り入れたのが座喜味地区であった、という。

- 6) 「大城の地域づくり構想」は、北中城村の新総合計画に定める村づくりの目標「全村植物公園づくり」の一つとして位置づけが行われ、「花と緑に囲まれた芸術の里」実現に向けた県、村の取り組みを整理し、大城区として次の6つの取り組みを掲げた。それは、①作品の入手、②大城公民館の建設、③公共空き地などの整備、④植物名の標示、⑤「我が家は芸術品運動」の推進、⑥モノづくり運動の推進、である。
- 7) ユンタクとは、沖縄方言で、「おしゃべり」を意味する。
- 8) モーアシビは、農村で、夜、若い男女が集落はずれの野原（モー）で遊ぶ（アシビ）、「毛遊び」のこと。男女混じって円く座り、三線に合わせて歌を唄い、踊った。おもに沖縄本島中南部で行われていた風習。
- 9) 「那覇市都市景観条例」は、地区内において建築物等の新築・増築・改築を行う場合、届出を行い、景観形成基準についてのデザイン調整を行う「届出制度」が骨格で、建築物の形態制限として、次の基準が示されている。①建築物の高さは10m以下、②屋根は原則勾配赤瓦（琉球瓦）、③2mの壁面後退、④垣・柵は原則1.5m以上の石積み、⑤道路への開口部は原則2.7m以下。また、助成制度として、景観に著しく寄与すると認められる瓦（琉球瓦）・石積み（琉球石灰岩）工事に対し、工事費の一部助成（対象工事費の1/2以下かつ100万円以下）が行われている。
- 10) 堀川恭宏さんは、首里高校を経て琉球大学工学部機械工学科に進み、卒業後は米軍基地の仕事で働き、戦後しばらくして金城町に居を構えた方である。自治会長を引き受けて今年で4年目に入る。
- 11) 「鬼餅伝説」のあらまは、次のとおり。昔、内金城御嶽の背後の崖上に兄妹が住んでいたという。のちに兄は人畜を食う鬼となった。これを知った妹は崖上に鬼を招き寄せ、鉄屑を入れた餅を食べさせ、弱った鬼を崖下に突き落としたという。また、この伝説には、こんな話も付け加わっている。鬼が鉄屑の入ったムーチーを食べかかっているところ、妹は米のムーチーを食べて着物の裾を開いて鬼の前に座ったという。驚いた鬼は「下の口は何を食うか？」と尋ねた。すると、妹は「上の口は餅を食い、下の口は鬼を食う」と答えた。驚いた鬼は、後ずさりしたはずみに崖下に転げ落ちて死んでしまったともいう。このように、鬼退治にムーチー（餅）が使われたことから、その日はムーチーを食べる慣わしとなったという。
- 12) トゥシビー（旧暦1月2～13日）は、生年祝いのことで、自分の干支の年を「トゥシビー」とも言っている。自治会では、「トゥシビー」の人に村屋に集まってもらい、饅頭とミカンを配って祝う。
- 13) 浜下り（旧暦3月3日）は、女の人が浜において身を清める、沖縄で広く行われている風習である。自治会では、この日、バスを1台借り切って与那原の海岸に遠足に行く。いい季節になったので、地域の人皆で楽しめよう、という趣旨でこの伝統行事を地域の行事に取り入れている。
- 14) ユッカノヒー（旧暦5月4日）は、子供たちにおもちゃを与える日である。生まれた子供を中心にして、健康に育つように、自治会行事として行っている。
- 15) トーカチ（旧暦8月8日）は、教え八十八歳の米寿お祝いである。自治会では、この伝統行事を地域の「敬老会」として行っている。
- 16) 十五夜（旧暦8月15日）は、月をまつり、豊年満作を祝う日である。十五夜は、自治会の青年部が中心になって行事を行っている。
- 17) 沖縄全島エイサー祭り（新暦8月）は、毎年旧盆明けの最初の週末に沖縄市コザ運動公園で行われるイベント。このイベントは、昭和31年のコザ市誕生を機に始まり、今では沖縄の夏の風物詩となった。このイベントには、本島各地から選抜された青年会などの団体が集まるが、金城町では、この行事に子供会中心で参加している。
- 18) 首里文化祭（新暦11月3日）は、文化の日に首里で行われる古式行列・祝賀パレードを中心としたイベント。古式行列は、琉球王朝が栄華を誇っていた頃、国の安泰と農作物の豊作を願って、円覚寺、天王寺、天界寺の3カ寺を参詣した様子を再現したものであるという。祝賀パレードには、自治会の青年部や子供会による旗頭が参加し、婦人部も踊りに参加する。これは、自治会が取り仕切る大きなイベントになっている。